The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	誰が「なぜ学校に来るのか」に答えられるのか?
Author(s)	寺田, 俊郎
Citation	臨床哲学のメチエ. 1998, 1, p. 12-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6905
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

があり、人と人の絆があるはずだと思うのです。

あの事件が起きる１カ月ほど前、私は犬を繋いで郵便局で用事をしていました。外で鳴いていた犬の声がふと静まり、用を済ませて出てくると、ある婦人が犬の相手をしてくれているのでした。その方は震災で飼犬を亡くされ、仮設住宅に住んでいる方でした。倒れた食器棚のガラスが犬のお腹にささったこと、家は全焼し、避難した小学校の体育館で、ボランティアの獣医の方が、傷口から膿の出た犬の手当をしてくれたこと、10日ほど生きて、犬はその体育館で静かに息を引き取ったこと、などを淡々と語られ、「あんまり悲しいので犬はもう飼わないことにしたんです。だから、こうやってよその犬に慰めてもらっている。」と、話されました。

「少年」が、その同じ郵便局のまえのポストから新聞社への「挑戦状」を投函したこと知ったとき、私は何とも言えない暗澹とした気がしてなりませんでした。確かに「息苦しさ」はあるのです。けれど、同じ場所が、そのご婦人と我が家の犬の「慰めあう」場所になっていたのも事実なのです。

地域社会がどんなに「息苦し」くても、それは所与のものであり、アウシュヴィッツでも、スラム街でも、ニュータウンでもそこに人間が暮らしていれば、かならず友情もあり、「人間の自由と尊厳」があるはずです。私はその人間性の確かさを信頼したいと思う。けれどこの事件の場合、「学校」が「少年」の人間性を封じ込めたもののひとつであるように思え、それはなぜなのか、彼に世界はどのように見えていたのか、私には分からないのです。

「不登校」を起こしていた息子は「少年」と１歳違い、「学区」でいえば、隣り合わせの様なところに住んでいます。その「はるかな隔たり」と「意外な近さ」に息を呑むのは私だけでしょうか。

（はたえり・研究生）

誰が「なぜ学校に来るのか？」に答えられるか

寺田俊郎

０．はじめに

教育現場の経験者として話題を提供することが私に与えられた役目ですが、この役目は私にとって少し荷の重いものです。というのは、私の教員としての経験はとても限られたものだからです。

私の主な教員の経験は、京都の洛星中学・高等学校に６年間英語科の教諭として勤務したことですが、大学院時代に非常勤講師として３つの私立高校－女子校で４年間、

男子校で１年間、共学校で１年間ーで教壇に立ったこともあります。期間も非常勤も含めてたかだか十数年ですし、学校もかなり落ち着いた私立高校ばかりで、中学校で授業を担当した経験はありません。特に、専任教員として勤務した洛星中学・高等学校は、ご存じの方も多いと思いますが、関西では有名な進学校です。昨今マスコミを賑わしている問題、「いじめ」、「校内暴力」、「授業崩壊」、今日の話題である「不登校」という現象と、日々格闘したという経験はありません。

このような私がここで話題を提供するのは不適当かも知れない、という危惧を拭い去ることはできません。ですが、こうして話題を提供することにしたのは、現場の経験がある臨床哲学専攻の学生としての義務という、単にそれだけの理由でもありません。「不登校」という現象が、私の勤めていた学校にも件数は少ないけれども確かに存在し、やはり同僚の教員や私が戸惑いを感ざるを得なかった事柄、他人ごとで済ますことのできなかった事柄であり、教育を考えるときに避けては通れない事柄の一つだと思われるからです。

１．「不登校」にまつわる私の経験

「不登校」という語を使ってきましたが、栗田さんや畑さんのお話からも分かるように、「不登校」といってもそれぞれの生徒で事情が違いますし、私が知っている事例も簡単に一括りにはできないように思われますが、「不登校」ということで私が思い浮べるのは次のような事実です。第一に、私の勤めていた学校では、病気療養などの理由がない長期欠席が恒常化していた、ということです。第二に、長期欠席には至らなくても、断続的に欠席を繰り返す休みがちの生徒、あるいは極端な遅刻を繰り返す生徒が今までなかったほど増えてきた、ということです。私自身は、長期欠席の生徒を授業で担当したことはありますが、担任したことはありません。休みがちの生徒は、担任したクラスにはいつも数人はいました。

担任や担任団（学年団）の教員は普段から長期欠席者や休みがちの生徒に対して、色々な配慮をするわけですが、その事実は一般の教員には進級（卒業）の問題という形ではっきり意識されることになります。これは学校によって違うと思いますが、進級規定によれば、欠席日数（遅刻日数も３日で１日欠席に換算）が要出席日数（授業日数から出席停止や忌引きの日数を引いたもの）の３分の１を越えた場合は、原級留置（留年）となります。しかし、校内で長期欠席が恒常的な現象となり、また「不登校」が一つの社会現象となっていて、文部省も一定の見解を示している今、長期欠席を単純に「怠学」とみなすことはできないのではないか、という意見があり、また、これからこのような事例は増えると予想されるから何らかの対策、たとえば、医師や臨床心理士などの「専門家」による判断があれば、例えば家庭学習の期間を出席日数に入れるなどの特別な処置を考えてもよいのではないか、という意見もありました。

その意見の前提になっていたのは、長期欠席の中には一種の「病的現象」とみなすべき事例がある、という認識だったと思います。「行きたい」、「行かなければならない」と思っているのにどうしてもいけないのは、やはり心身症的な症状であろうというわけです。これは、単なる「怠学」とそうでない長期欠席を区別するためには、わかり易い図式ではありました。私は一種の「病的現象」という把握は適切だと思います。なぜなら、そこには本人の苦しみがあり、家族の苦しみがあるからです。ただ、その「病的現象」を一方的に本人の気質や家庭の環境のせいにするのは見当違いだと思います。もし学校というものがなかったら、あるいは少なくとも今のような学校のあり方がなかったら、悩まされずに済んだ病かもしれないのですから。

あれこれ議論はあったものの、結局どのように対処すべきか結論のでないまま、今のところ従来通り担任と担任団の教員に委ねられています。たいていの学校がそうだと思いますが、クラスのことについては、まず担任が責任をもち、担任の判断と努力が尊重されます。担任は、家庭と連絡をとるなどして、できるだけ登校できるようにする方向で努力します。やり方は各担任各様で、私も関わった例としては、夏季休暇中に登校させて、補習をしたり語り合ったりしながら登校することへの抵抗感を減らそうという試みがありました。しかし、結局、休学ないし退学届けが出るか、原級留置となるかのいずれかがほとんどでした。そして、多くの生徒がそのまま退学します。

さて、私は昨年度（９７年度）保健部長として一年間保健室で過ごしました。長期欠席や休みがちの生徒が増えていることに加えて、身体の不調や健康の相談以外のことで保健室に来る生徒が少なからずいることもあり、前任の保健部長に引き続き「心のケア」ということを考えてみようと思いました。臨床心理士など専門のカウンセラーを導入してはどうかとも考えました。（「カウンセラー」という役職はありましたが、一般の教員から希望を募って校長が任命するものでした。）こうした発想は、私の勤め先だけではなく、多くの学校に共有されていたものです。それは、「全国私学保健研修会」や「京都府保健主事研修会」など公的な研修会でも「心のケア」が相次いでテーマとして取り上げられたことからもわかります。私もそういうところへできるだけ出掛けていって、スクール・カウンセリングに関する講演や実践報告を聴きました。ある高校の専任のカウンセラーの報告によれば、カウンセラーと養護教諭や担任団が連携して態勢をつくることが大切だということでした。また、ある高校の養護教諭の報告によれば、非常勤のスクール・カウンセラー、養護教諭、担任教員、その他の関係教員が集まって毎週会議（一種の「カンファランス」）を開き、成果をあげているということでした。それに触発されて、「不登校」やその他の悩みを抱える生徒をもつ担任教員を後方支援する態勢がつくれないかと考えましたが、在任中に具体化することはできませんでした。

「とにかく専門家を」という発想は、今から思えばいかにも安易に思えます。カウンセラーを活用するといっても、畑さんのお話にもあったように、専門家におまかせ、という態度では問題は解決されません。これは、私が報告を聞いたカウンセラーも強調していたことです。しかし、どう対処してよいのかわからず戸惑う教員にとって、一つの選択肢に思えたのは確かなのです。

2. なぜ学校に来なければならないのか

「不登校」の生徒を目の前にする教員として最も知りたいのは、このような「不登校」という現象がどうして生じるのか、これに対してどのような姿勢で臨むのがよいのか、ということです。私は、変化していく生徒の生活感情や価値観と、旧態依然とした学校との間にずれが生じていることは明らかで、それが原因ではないかと漠然と考えていましたが、専門家の本を読んで勉強するというところまではいきませんでした。高度経済成長による大衆社会の成立や都市化など、現代社会のさまざま現象との関係のなかで「不登校」という現象を理解しようとする試みがなされていますが、今日は他の角度から考えてみたいと思います。それは、教員として学校に来させる努力をしながらも、心に引っ掛かる一つの問い、「なぜ学校に来るのか？」です。これは、生徒の側から言えば「なぜ学校に行くのか？」ですが、栗田さんが生徒としては問うことができないと言われたものであり、畑さんが話された「学校で学ぶとはどういうことなのか？」という問いにも関わります。

私の勤めていた学校には、学校が大好きな生徒も少なからずいました。が、大多数の生徒は、特に好きではないがそれほど嫌でもない、といったところではないでしょうか。しかし、そんな学校でも、学校になじめず、登校したくなくなる生徒がいるのは不思議ではありません。ある学校特有の雰囲気、たまたま入った学年やクラスの雰囲気になじめないことは大いにあり得ます。また、様々な面倒な規則があります。しかも、学校生活の大部分を占める「勉強」は面白いものではありません。どうして大多数の生徒が学校に来ることができるのか、よく考えてみると不思議なくらいです。

「勉強」が面白くない、と言いきりました。これは、生徒に勉強の意欲がないということではありません。多くの生徒が数学や英語はよく勉強します。放課後塾に行ってまで勉強します。しかし、多くは数学や英語は「主要教科」と称して、大切だから勉強しなければならないということで勉強しているのであって、面白いと感じて勉強している生徒は少ないように見受けられます。その反動が他の教科に表れて、例えば倫理や家庭科を「副教科」と称して勉強しないということになります。これは私が高校生だった頃既にあったことですが。

では、なぜ大多数の生徒は学校に来ることができるのか。一つは、勉強以外に面白いことが色々あるからです。なかでも友人との付き合いは多くの生徒にとって大切なものです。また、クラブ活動に熱中している生徒もかなりいます。しかし、最も大きな力として働いているのは、やはり「学校神話」とでもいうべきものではないでしょうか。「学校には行くものだ」に始まり、「先生の言うことは聞くものだ」というような、教えるものとしての教員と教わるものとしての生徒という役割、さらには、授業中は静かにする、指名されたら答える、ノートをきちんととる、などの細かなことに至るまで、学校にまつわる様々な了解と習慣ができあがっています。この「学校神話」は少しずつ崩れつつあるように思われますが、「学校には行くものだ」という感覚は依然として強いと思います。

この「学校神話」と微妙な関係にあるのが「受験神話」です。大学に進学することを、それも「よい」大学に進学することを至上の価値とするこの考え方は、私が高校生の頃も世間に浸透していましたが、その力はいっそう強まっているように思われます。進学指導は「受験産業」との付き合いなしに考えることはできず、受験を看板にする塾や予備校に通うことが高校生の文化・風俗の一部となり、先の「主要教科」、「副教科」という割り切りに見られるように、勉強に対する高校生の意識を強く規定しています。この「受験神話」は「学校神話」を強める方向と弱める方向の二つの方向で働いていると思います。「受験神話」は、受験に直結する教科を勉強する動機を与え、受験に熱心な学校へ進学する動機を与えることによって「学校神話」を強めると同時に、受験に直結しない教科や学校生活を無視する風潮を強めることによって、「学校神話」を弱めているように思われるのです。実際、学校は進級規定ぎりぎりの日数まで欠席して、予備校を中心とする受験勉強をする生徒（「不登校」？）も少数ながらいるし、本当はその方が能率的だと思っている生徒はかなりの数にのぼると思います。高校は大学進学に必要な証明書を発行してくれるところでしかないということになります。

こうしたなかで、受験対応のみが勉強の有効な動機になっています。学校は「なぜ勉強するのか？」という問いに説得力のある答えを与えられないということ、つまり、生徒に学校に行くことを納得させるだけの理由を示せないということです。もちろん、少なからぬ教員が、授業を面白いものにしよう、生徒の知的好奇心に訴えよう、学ぶことの意味を伝えよう、と努力しています。実際に優れた実践をされている先生方もおられます。しかし、個人的な努力のみでは、

生徒にそっぽを向かれてしまい、かろうじて「受験神話」を利用して生徒をこっちに向かせているというのが、多くの教室の現実です。これは、よく言われるような「知育」の偏重などではなく、「知育」の空洞化です。そして、論理的に考えること、他人の考えを理解すること、考えたことをわかりやすく表現すること、など「知的活動」の基本さえ十分トレーニングできないのです。「進学校」だからでしょうか。いや、「進学校」なのに、と私は言いたいのですが。

このような学校にどうして行かなければならないのでしょうか。来させなければならないのでしょうか。

３．「なぜ学校に行くのか？」に答えられるか

「なぜ学校へ行くのか？」といっても、ここまでは「今の学校になぜ行くのか？」という問いでした。この問いは、おのずから、さらに大きな問い、「そもそも学校というものになぜ行くのか？」に進みます。

というのは、たとえ「受験神話」が効力を失ったとしても、学校はそれにかわる教育の内実をもっていないからです。先に述べた「知育」の空洞化は、「受験神話」によって引き起こされたのではなく、むしろ「知育」が空洞であったからこそ、そこに「受験神話」が入り込んだのではないでしょうか。「受験神話」が本来の学校教育を侵食したのではなく、もともと隙間があったところへ「受験神話」が浸透したというのが真相だと思われるのです。今の学校に限らず、我々の知っている学校というものは生徒に学校に来るべき理由を示すことができないように思われるのです。「不登校」という現象は、「なぜ学校というものに行くのか？」、「学校で学ぶとはどういうことか？」、「何が学ぶに値することか？」といった、学校教育の根本に関わる問いを突き付けていると思います。

誤解のないようにいっておきますが、私がお話したのは、学校はもう形骸化した、機能していない、ということではありません。今も学校で多くの生徒がいい経験をし、成長して卒業していくのです。学校はそれなりに機能し、社会的な役割を果たしています。しかし、だからといって、学校に行く意味があるとはいいきれないこと、学校にいく意味をもっと根本から問い直さなければならないこと、を「不登校」という現象は示している、それが私のお話ししたかったことです。

（てらだとしろう・博士後期課程）